BOOK IX — 自由の代償

第06章 — 70パーセントを超えて

01 — 監視下の朝

朝の六時、食事を載せたトレーがロイの病室に運ばれてきた。係の女性はコーヒーがないことを詫びた。配送車が南側の入口で止められ、積荷が許可済みの医療物資の一覧と照合されているのだという。

ロイは礼を言い、女性が出ていくのを待ってからトレーに手を伸ばした。

慣れ親しんだ動作だった。だが、その結果は違った。右肩から首にかけて鋭い痛みが走り、テーブルに向かって伸ばした手が途中で止まった。

レイチェルがトレーを引き寄せた。

「頼んでくれればよかったのに」

「自分でできるか確かめたかった」

「これで分かったわね」

窓の外では、軍の整備士が一晩中中庭に停まっていた車両の一台を点検していた。灰色のコートを着た三人の姿は、もう病室からは見えなかった。だからといって、病院を包囲する兵力が減ったとロイは考えなかった。

間もなくイマニがやってきた。肩と肋骨に沿った打撲を診察し、以前の治療記録を開いた。ハヴェルとの戦いで受けた損傷は身体の一箇所に限られていなかった。軍用レプリカントに壁へ投げつけられたとき、複数の身体機能が互いの不具合を補っている状態だったのだ。

「回復途上だったんです」と彼女は言った。「回復したわけではありません」

ロイは70パーセントという制限について尋ねた。負傷後の最初の診断からずっと付きまとっている数字だった。その後の戦いでは、甘すぎる制限に思えたこともあれば、馬鹿げているほど低い数字に思えたこともあった。

イマニは、その数字が損傷した身体に安全に許容できる総合出力の上限を示しているのだと説明した。個々の筋肉の力や神経の伝達速度を示す数字ではない。今日、その水準まで出力できるという保証でもなかった。

「どこかが壊れるまで負荷をかけて、今のあなたがその数字をどれほど下回っているのか確かめるつもりはありません」

彼は診療記録を見つめた。

「いつ制限を解除してくれる？」

「もう制限は必要ないと判断できる根拠が得られたときです」

廊下から、清掃員が手押し台車をめぐって兵士と言い争う声が聞こえた。自分で床を洗うつもりなのかと清掃員が尋ねたところで、言い争いは終わった。

ロイは微笑んだ。その拍子に肩が痛んだ。

02 — 画面の数字

エイドリアン・タイレルは同じ階にある小さな診察室の使用許可を得ていた。リンが研究棟から二つの圧力センサーを持ってきた。イマニは両方とも点検してから、ロイの身体に取り付けることを許可した。

予定している検査には組織の改変も、制限を解除する試みも含まれていなかった。ロイが主治医の認めた範囲内で日常的な動作をいくつか行い、負荷がどのように分散されるかを測定するのだ。

レイチェルは、外の状況が変わった今も検査を受けたいのかと尋ねた。

「今だからこそだ」

「結果は軍には渡さないわ」

「分かっている」

エイドリアンはロイにも見えるようにモニターの位置を調整した。いくつかの領域に区分された上半身の図が現れた。ロイが左手を持ち上げると、その色が変化した。

最初の試行では何も起こらなかった。二度目にはもう少し大きく動かした。腕がイマニの指定した位置に達するよりも先に、負傷した肩の近くの領域が変色した。

彼はイマニの指示に従って腕を下ろした。

「こっちは怪我をしていない腕だぞ」

リンがセンサーを確認した。二つの測定結果には同じパターンが現れていた。

エイドリアンは、負荷の大部分が、動作を始める前にロイが身体の他の部分を安定させようとする方法から生じているのだと説明した。本来なら負荷を分担するはずの構造が、何を脅威と見なすべきかについて、それぞれ異なる指示を受けているかのように働いていた。

「その指示を変えることはできるのか？」

「この結果だけでは無理だ。だが、なぜそんな指示が出されるのかは分かるかもしれない」

ロイは灰色のコートの男にも同じパターンが現れるのかと尋ねた。

すぐには誰も答えなかった。

やがてエイドリアンは、相手の医療データがない以上、比較は憶測にすぎないと言った。M-04にも同様の身体保護のための制限が課されているという前提すら、裏付ける証拠がないのだ。

ロイはモニターに向き直った。画面の隅に、今回の運動で許容される範囲を示す小さな数字があった。70パーセントをはるかに下回っていた。

彼は数字が大きくなるのを見たかった。だが今、使うつもりもなかった身体の一部に色が広がっていくのを見ていた。

「もう一度？」

イマニは首を振った。

「休憩してからです」

彼は座ったままでいた。中庭での一件以来初めて、自らの身体が失敗した記録を、すぐに修正したいという衝動に駆られずに見ることができた。

03 — 身体が覚えていること

次の記録は一時間近い休憩の後に取られた。エイドリアンは、壁の目印に届かせようとせずに同じ動作を繰り返すようロイに求めた。

ロイは目印の少し手前で止めた。同じ領域の色が変化したが、今回はその変化がいくぶん小さかった。

ロイはハヴェルが剣を持ち上げたときの老人の表情を思い出した。攻撃の予備動作が見えると思っていた。だが実際に目にしたのは、これまで必ず必要だと考えていた力みが存在しないことだった。

ライジンとフウジンは、ロイが自分の思い込みを世界の法則だと信じていたことに気づくよりも先に、そのいくつかを打ち砕いていた。彼らは人間だった。その身体には、ロイの身体が超えるように造られた限界があった。それにもかかわらず、彼らにはロイが十分に対応できない動きが可能だった。

彼はエイドリアンに、彼らの動きを先読みしようとしたときの感覚を話した。動作の始まりを認識した頃には、すでに終わった動きに反応していることが何度もあった。

エイドリアンは口を挟まずに聞いていた。それから、M-04が動く前にも同じようなことを感じたかと尋ねた。

「何も感じなかった。それが問題だった」

「二つは別の現象かもしれない」

ロイは左手を見た。

「俺の立場からすれば、同じ感覚だった」

エイドリアンはその違いを書き留めた。同じ結果が生じても、同じ機序によるとは限らない。ハヴェルの並外れた力の使い方、人間の護衛たちの身体制御、軍用レプリカントの反応速度には、まったく異なる要因があるのかもしれなかった。

イマニの提案で、ロイはもう一度その動作を行った。今度は自らの腕の重みを感じるまで、肩の力を抜いたままにした。圧力の分布が変わった。ほぼ同じ位置まで腕を上げても、負傷部位の近くで測定された負荷はわずかに低かった。

リンは測定を繰り返した。次の試行では改善幅が小さくなり、その次には改善が見られなくなった。

「まだ再現性がないわ」と彼女は言った。

ロイは頷いた。

彼は成功した動作を繰り返すように造られていた。今、難しいのは、一度成功したからといって繰り返すべきではない動作を見極めることだった。

イマニが検査を終えたとき、敵について新たに分かったことはほとんどなかった。だが、その敵に戦いを挑んだ者については、何かを知ることができた。

04 — 治癒ではない修復

研究棟では、百年計画のために二つ目の実験台が用意されていた。その一方で、いくつかの通常の調達先から物資を入手できなくなっていた。リンは病院に残っている材料で継続可能な実験を一覧にまとめ始めていた。

レイチェルはその一覧と、ハヴェルの保管資料から回収した文書を見比べた。古い提案書の一つには、周囲の組織にかかる電気的負荷を増やすことなく、損傷した構造の接合部を維持する方法が記されていた。

提案された部品には、以前に彼らが着目した軍の受領基準に関連する参照番号が付されていた。だが、その関連だけで軍が生体内に使用したと結論づけることはできなかった。元の受領文書には依然としてアクセスできなかった。

生体ではない試料で部品の一部分を再現するだけの材料は残っていた。リンが試料を実験装置に入れた。エイドリアンは計測値が安定するのを見守った。

負荷を取り除いて再試験するまでは、特筆すべき結果は得られなかった。実験試料は比較用の試料よりも元の形状に近い状態に戻った。しかし三回目の試験では、新素材に微小な亀裂が生じた。

リンはその亀裂を撮影した。

「二回目で試験をやめていたら、見落としていたわね」

レイチェルは上の階にいるロイのことを思った。彼ならおそらく三回目の結果を聞く前に、最初の二回の結果を知りたがっただろう。

エイドリアンは別の試料を用いた追加試験を提案した。患者への実験材料の使用は明確に除外した。ヘリウム3を用いた動力源の設計図は再びファイルに戻された。その朝の出来事は、そのエネルギー源の実用化をいささかも近づけてはいなかった。

病院の技術者が、管理部からの通知を手に入ってきた。物資搬入の制限が続く間、研究棟は電力消費を減らさなければならないという。技術者は作業を中断させたことを詫びた。

レイチェルは病棟にどれほどの電力が必要なのかと尋ねた。

「昨日考えていた以上です」

彼女は改訂された電力配分に署名した。集中治療用の機器に電力を割り当てる時間帯は、実験装置を停止させることになった。

技術者は通知を持って出ていった。

実験台の上の壁には暫定憲章の写しが掛けられていた。誰かがその下にあった机を動かした際に、紙に折り目がついていた。研究チームは、自発的に研究を行う権利を守るためにその憲章を用いてきた。その朝、レイチェルはそもそも何のために研究をしているのかを、憲章に改めて思い出させられた。

05 — 異なる測定尺度

文民局長は確保部隊に対する二度目の評価を求めていた。正午少し前、国防事務局でその報告書を受け取った。

報告書には機密指定された三人の識別番号が記載されていたが、彼らがどのように製造されたかについての記述はなかった。報告書の作成者は、病院での遭遇を再現した訓練での彼らの能力を、実際の映像記録から得られたデータと比較していた。

二つの状況における違いの一つは、ロイから予想される抵抗の程度だった。もう一つは、実力行使が許される空間の広さだった。病院では、軍事施設内には存在しない制約を確保部隊は受けていた。

局長は、M-04が最大能力の範囲内で行動していたのかと尋ねた。

評価を担当した将校は、記録されたいずれの動作からも最大能力を測定することはできないと答えた。

「ならば推定値を出してくれ」

「M-04の能力ですか、それとも対象者の能力ですか？」

「両者の差だ」

将校は報告書を閉じた。特定の条件下での両者の能力を推定することはできる。だが、不完全な二つの医療情報からその差を一つの信頼できる数値で示すことはできなかった。

局長には、その異議は必要以上に学術的なものと思われたようだった。

ヴェン将軍はテーブルの反対側で話を聞いていた。そもそもなぜ評価を依頼したのかと尋ねた。機密指定された部隊員がロイを拘束できると考える十分な根拠は、すでにあった。問題は、法的な正当性が争われている指令の下で、稼働中の病院において拘束が試みられたことだった。

局長は、政府の利害は一度の作戦に投入される資源だけにとどまらないと主張した。ロイの制限が一時的なものであれば、将来の確保作戦にははるかに多くの費用がかかる可能性がある。

ヴェンは技術顧問に向き直った。

「彼の制限が一時的だという証拠はあるのか？」

「彼が治療を受けているという証拠はあります」

局長は医療上の理由による作戦停止措置が失効する前に、追加の人員を配備するよう求めた。

ヴェンはその要請をすぐには承認しなかった。病院全体を軍の管理下に置いた場合に避難を必要とする人の数など、民間人に及ぼす影響を評価するよう求めた。

局長はそうした数字を持ってきていなかった。

それから会議が終わるまで、確保部隊についての議論にロイの名前が出ることはなかった。部隊員自身の名前も出ることはなかった。

06 — カップの重さ

午後、イマニは新しい肩の固定具をロイのもとへ持ってきた。デレンに会うため階下に向かう前に外したものより軽かった。衝撃から身体を守る能力は低かったが、より幅広い日常動作を介助なしに行えるようになっていた。

「これは防具ではありませんよ」と彼女は言った。

「そんなことは聞くつもりはなかった」

「そういうものかもしれない、という目で見ていましたよ」

彼女は固定具の調整を手伝い、戦うこと以外のほとんどすべてに関わると思える指示を残していった。歩くこと。食べること。眠ること。痛みに変化があれば病室に戻ること。

レイチェルがコーヒーを持って入ってきた。朝の配送物がようやく解放されたのだ。

ロイは左手でカップの一つを取った。実験中の動きを再現しようとはせず、ゆっくりと持ち上げた。まだ痛みはあったが、動きを止めずに一口飲むことができた。

レイチェルは向かいの席に座った。

「何か分かったか？」彼は尋ねた。

彼女は試料について、三回目の試験で生じた亀裂も含めて説明した。

「じゃあ、うまくいく可能性はあるんだな」

「いずれはね。まだ人間の身体に入れたこともないものだけれど」

彼女がそれ以上のことを言いたがらない理由は分かった。最初の人生で、ロイは自らの死という問題の答えを求め、その答えを与えてくれるかもしれない者たちの命をほとんど顧みなかった。同じ問題に取り組む人々を、自らの切迫した欲求から守らなければならないような存在になるとは考えてもいなかった。

彼はカップを置いた。

「ハヴェルと戦う前の力をすべて取り戻せたとしても、十分だとは思えない」

レイチェルは彼の考えを否定しなかった。

「それなら、すべてを取り戻すことだけが私たちの目的にはできないわね」

彼は窓の方を見た。前日の午後からほとんど絶え間なく軍の動きを考えていた。病院から出ていく場面を想像するたびに、頭の中には中庭での新たな対峙が浮かんだ。どの場面でも結論は同じだった。どこかへ行くには、まず誰かを倒さなければならない。

そうするつもりなどなかったのに、自らの次の決断の形を決める権利を軍に与えてしまっていたのだ。

「ここを出る必要がある」と彼は言った。

「ええ。でも、入口の前でもう一度戦って出ていくのではなくてね」

病室の光がゆっくりと変わっていく中、二人はコーヒーを飲んだ。

07 — 例外措置の終わり

十六時四十分、デレン大尉は医療報告書を受け取った。定められた条件の下で、ロイを適切な治療施設に移送できると記されていた。身体拘束に対する警告が含まれており、身柄の引き渡しを許可する記述は一切なかった。

デレンは文書の全文をヴェン将軍に転送した。

将軍からの返答よりも先に、国防事務局から回答が届いた。医療上の例外措置は直ちに再審査されることになった。政府の別館が移送先として適切かどうかを評価するため、軍医が任命されていた。

サトウは彼の肩越しに通知を読んだ。

「移動できると判断したんですね」

「報告書にはそうは書いていない」

「分かっています」

連絡将校が二通目の通知を手に近づいてきた。この地区への追加の軍事資源の投入が承認された。より広範な作戦の指揮を引き継ぐため、統合作戦計画班が日没までに到着するという。

デレンは、自分の指揮権が取り消されたのかと尋ねた。

「今のところはまだです」と将校は答えた。

中庭の端で、M-04は前日の夕方に車両から降りてきた女性と並んで立っていた。二人は建物の間を行き来する病院職員の動きを観察していた。デレンが呼ぶと、男はロイとの対峙の際に見せたのと同じ、無駄のない動きで振り返った。

デレンは、将軍から明確な指示があるまでは一時的な作戦停止が有効だと伝えた。男は了承した。

「指揮系統が変わるかもしれない」と彼は付け加えた。

M-04はいつ変更されるのかと尋ねた。

「まだ知らされていない」

男は元の位置に戻った。その変更が自分にとって何を意味するのかも、誰かが自分の同意を求めるのかも尋ねなかった。

サトウは入口で配送車の運転手が看護師に受領書を渡すのを見ていた。やり取りに一分もかからなかった。看護師が礼を言うと、運転手は彼女を下の名前で呼んだ。

「作戦が終わったら、彼らはどうなるんですか？」彼女は尋ねた。

デレンは病院の人々についての質問だと思った。作戦がどのように遂行されるかによると答えた。

彼女はM-04の方を見た。

「あの三人のことです」

彼には答えがなかった。

08 — 到着時刻

レイチェルは封印された研究資料の保管場所のそばに立っているとき、医療上の再審査の通知を受け取った。二度読んでから評議会の代理人に連絡した。代理人によると、評議会の作戦停止措置は解除されていなかった。ただし、評議会の立場に関わりなく軍の再審査が行われる可能性があると警告された。

エイドリアンは最新の実験記録を確認していた。レイチェルから通知のことを聞くと、その手を止めた。

二人は研究資料の原本を適法な管理下に置いたままにすることで合意した。自分たちの観察記録の写しと、封印されたままの資料の一覧を用意した。持ち出せる治療法も、百年の命に値する技術の完全な記述もなかった。

それでも、実験台には一週間前には存在しなかった研究成果があった。レイチェルはその研究が、ロイや自分がここにいることに依存せずに続くことを望んだ。

ロイのところへ行くと、彼はコートの下で新しい固定具を締めていた。誰にも助けを求めずにコートを着ることができたようだったが、額にはうっすらと汗が浮かんでいた。

「まだ無理よ」と彼女は言った。

「分かっている」

彼女は再審査について話した。ロイは口を挟まずに聞いてから、残り時間がどれほどあるのか尋ねた。

レイチェルには確かな答えがなかった。代理人は軍の連絡将校から情報を得ようとしていた。病院の管理部は患者の安全に関する書面での保証を求めていた。次の命令がいつ届くのか、誰にも分からなかった。

廊下の向こうからイマニが二人に近づいてきた。ファイルを手にしており、別の病室で着用していた手袋もまだ外していなかった。

ロイは作戦停止措置が失効しても病院に残るつもりはないと伝えた。彼女は長い間ロイを見つめ、それから、治療先が確保されないまま出ていく危険を理解しているのかと尋ねた。

ロイは理解していると答えた。

「それなら、今のあなたに実際に何ができるのか、話し合う必要があります」と彼女は答えた。「怪我をする前にできたことではなく」

外で低い音が屋上を通り過ぎた。続いて二度目の音が、窓ガラスを震わせるほど近くで響いた。ロイとレイチェルは窓辺へ向かった。

北部地区の上空を数機の軍用機が移動していた。病院に向かって降下する様子はなかった。周囲の建物の向こう、民間車両の通行が迂回させられた高架道路に、一つ、また一つと明かりが現れ始めた。

デレンの車両はまだ中庭に停まっていた。それまでは、ロイが目にすることのできた作戦のすべてがそこにあった。

彼はコーヒーカップを持った手を見た。震えてはいなかった。その日初めて、そんな小さなことができたことに感謝した。

彼はまだ70パーセントの制限の中で生きていた。彼を待っている新しい身体も、軍用機を消し去ることのできる未知の力もなかった。

エンジン音が建物の向こうへ遠ざかるまで、レイチェルは彼の隣に立っていた。

やがて二人は窓から離れた。

第06章 終。